

生誕 1200 年 在原業平の魅力を探る

業平が後世まで愛された理由とは

春風公民館職員 霜澤 喜代子

1 政争に巻き込まれた在原業平の父・阿保親王

在原業平は、平安時代初期の貴族（元皇族）で和歌に秀で、六歌仙や三十六歌仙の1人であり、百人一首にも選ばれている歌人である。また、現存する最古の歌物語である『伊勢物語』の主人公のモデルとしても知られる。

825（天長5）年に誕生した業平の父は、平城（へいぜい）天皇の長男である阿保（あぼ）親王、母は親王の正妻・伊登（いと）内親王。平城天皇の父は桓武天皇、母の伊登内親王の父も桓武天皇で、業平は父方をたどれば桓武天皇の曾孫、母方をたどれば桓武天皇の孫となる高貴な血筋であった。異母兄（いずれも母は不詳）に在原行平、守平などがおり、業平は五男であったため、業平には「在五中将（ざいごちゅうじょう）」の別名がある。

高貴な血筋を持つ業平だったが、政治的には不遇であった。その大きな原因となったのが、業平誕生前の810（大同5）年に発生した「菓子の変（平城太上天皇の変）」である。業平の祖父・平城太上天皇が、弟の嵯峨天皇と対立して失脚し、阿保親王も大宰府へと左遷。平城太上天皇の死で都への帰還を許され、伊登内親王を妻として業平が誕生したが、皇位は既に嵯峨天皇の子孫に移っていた。業平誕生の翌年、阿保親王は子供たちの臣籍降下を願い出て「在原」の姓を賜り、彼らが皇位継承争いに巻き込まれることを防いだ。

桓武天皇や嵯峨天皇も子女が多く、皇位継承争い防止の他、国家財政の負担を減らして官僚として自立できるように（皇族が就任できる官職は少ない）臣籍降下させる例が多かった。これが「桓武平氏」「嵯峨源氏」である。

842（承和9）年、嵯峨天皇の子・仁明（にんみょう）天皇の後継者を巡る対立に、阿保親王は巻き込まれる。仁明天皇の皇太子は先帝の皇子・恒貞親王であったが、天皇と藤原順子の間に道康親王が誕生し、順子の兄で当時の権力者・藤原良房は、道康親王が皇太子となることを望んでいた。この状況に危機感を感じた皇太子の側近・伴健岑（とものこわみね）の友人・橘逸勢（たちばなのはやなり＝「三筆」の1人）は皇太子に危険が迫っているとし、その身柄を東国に移すことについて、阿保親王に相談した。阿保親王はこれを皇太后の橘嘉智子（たちばなのかちこ 橘逸勢の従姉妹で亡き嵯峨天皇の皇后）に密告。計画は露見して恒貞親王は廃太子、伴健岑や橘逸勢は流罪となり、道康親王が皇太子となった（承和の変）。阿保親王は事件を穏便に収めるために皇太后に密告した（皇太后が逸勢を説得して

計画を断念させることを期待した）とする説もあるが、その期待は裏切られた。

3 か月後に阿保親王は 51 歳で死去し、「承和の変で反乱を未然に防いだ」として、死後に皇族に与えられる最高位の一品（いっぽん）を追贈された。承和の変から全く参内しなかったことやその死が急であったことから、政争に巻き込まれて心身が衰弱したと考えられる。この時業平は、まだ朝廷に出仕する前の 18 歳であったが、政争に巻き込まれた父の姿は、業平の生き方に影響を与えた可能性もある。

2 在原業平と行平の官歴

在原業平の官歴は、仁明天皇時代、左近衛将監（さこのえしょうげん 従六位相当の武官）と天皇側近の蔵人（くろうど）の兼任（23 歳）から始まる。2 年後には、従五位下を授けられた。

ところが次の文徳（もんとく）天皇（道康親王）時代には昇進がなく（降格の可能性大）、官職に就いた記録もない。しかし『伊勢物語』が描く東下りが史実かどうかについては、議論がある。この時期、異母兄の行平も冷遇されていた。

文徳天皇の子・清和天皇時代になると、38 歳で正六位上から従五位上、45 歳で正五位下、49 歳で従四位下に昇進。官職では一貫して武官を務め、特に右馬頭（うまのかみ）を 10 年以上務めた。

清和天皇の子・陽成天皇時代には従四位上・右近衛権中將に叙任（53 歳）。その 2 年後には蔵人頭（くろうどのとう）という天皇側近の要職を務めるが、880（元慶 4）年 5 月 28 日死去。享年 56 歳。

最高位の家柄に生まれたものの、皇位に就く可能性を断たれ、官人としても恵まれずに中級貴族としてその生涯を終えた業平は、政治的敗者として「不遇」「悲劇性」を持つ人物とされた。これが業平の魅力の 1 つとなっている。

一方業平の 7 歳年上の異母兄行平は、9 歳で臣籍降下。23 歳の時、仁明天皇の蔵人に任じられ、翌年従五位下・侍従、29 歳で従五位上・右近衛少將と昇進する。しかし次の文徳天皇時代には、正五位下に昇進（36 歳）するまで 7 年もかかり、その 2 年後に従四位下に昇進したものの因幡守として都を去らざるを得なかった（2 年後に都の官職に復帰）。また『古今和歌集』の詞書によると、理由は不明だが文徳天皇時代に須磨に蟄居を余儀なくされたとあり、この時代が行平・業平兄弟にとって不遇の時代だったことがうかがえる。

清和天皇時代の行平は、45 歳で従四位上、4 年後に正四位上、53 歳で参議に補任され、上級貴族である公卿の一員となる。56 歳で従三位・大宰権帥（だざいのごんのそち）に叙任され、九州の統治について新たな政策を提案し許可された。続く陽成天皇時代には、65 歳で正三位・中納言に至るが、次の光孝天皇（陽成天皇の大叔父）の時代、70 歳で辞職。宇多天皇（光孝天皇の子）時代、76 歳で死去している。晩年の行平は、当時盛んだった「文章経国」思想（漢詩文が作られて文学が栄えることが、国家経営の大業に繋がるという思想）に対応するため、在原氏の子弟の教育機関「奨学院」を設立した。

3 公的歴史書が伝える業平の人柄

行平は公卿の一員として中央政局で活躍する機会を得、業平の他の異母兄弟たちも堅実に官人としての責務をこなし、中級貴族としての道を歩む。しかし業平は、彼らと異なる「異端児」であった。

平安時代前期に編纂された公式歴史書『日本三大実録』には、業平の死を伝えた後、簡単な略伝（卒伝）を記している。それによると業平は

- ・「体貌閑麗（たいぼうかんれい）」顔立ちや姿態が品よく、美麗
- ・「放縦不拘（ほうしょうふこう）」行動や言動が自由奔放で、常識にとらわれず、束縛されない という記述の後
- ・「略無才学（ほぼさいがくなきも）」貴族の子弟として、必須科目である漢詩文の才能には乏しいが
- ・「善作倭歌（よくわかをつくる）」和歌の名人であった と続く。

国が編纂した公的歴史書に「体貌閑麗」と記された業平は、昔から美男の代名詞であった。48歳の時には、渤海（ぼっかい 8～10世紀に中国大陸東北部～朝鮮半島北部にかけて繁栄した国で、日本とも奈良時代から国交があった）の使節が入京したため、使節の宿泊する鴻臚館（こうろかん）を業平が訪れ、苦勞をねぎらい様子を尋ねている。業平は、漢詩文や儒学の教養は乏しかったが、容貌や和歌の才能に優れ、相手の気持ちを理解する心優しい人物であることが考慮された人事だったのだろうか。

また業平は、兄の行平と共に鷹狩の名手であった。鷹狩は当時権威の象徴であり、天皇や皇族、上級貴族のみに許されていた。高貴な血筋で鷹狩の名手（運動能力が高いと思われる）、そして容貌が優れているというのが、業平の魅力の1つであろう。

一方業平には、世の中の常識に従うよりも、自分の心に正直に生きる傾向が強かった。官人として出世の道を進むためには、漢詩文の才能を磨く必要があるにもかかわらず、業平は漢詩文より和歌に熱中する。当時和歌は、漢詩文より一段低いものと位置づけられていたが、日本人の身体が持つリズム感に裏付けられた和歌は女性に愛され、女性と恋文をやり取りするためには、和歌の作成は必須であった。業平は多情多感であり、男性でありながら和歌を通して女性の心もよく理解でき、その結果として多くの女性から愛された。

権力よりも「美しさ」や「情感（みやび）」を求め、敢えて「禁断の恋」に踏み込むことも辞さなかった業平には、「反体制的貴公子」のイメージがあり、これも彼の魅力の1つになっている。

4 業平を巡る女性たち① 藤原高子

業平を巡る女性で、まず名前が挙がるのは、藤原高子（たかいこ）である。

高子の父は、当時の最高権力者・藤原良房の兄・長良（ながら）を父として誕生し、兄の1人に良房の養子となった基経がいる。15歳で父を亡くした高子は、藤原氏の大切な后候補として、良房の保護下にあった。叔母（良房の妹）である文徳天皇の母・藤原順子に仕え、18歳で五節舞姫（ごせちのまいひめ）に選ばれて、将来の後候補として世間も認知。25歳で9歳年下の清和天皇に入内するが、『伊勢物語』では、入内前の高子と業平が恋仲になっており、高子の兄・基経らが2人の恋を阻止したと描かれている。

入内した高子は、2年後貞明親王を産む。高子は清和天皇との間に2男1女を儲けるが、天皇は氏姓を問わず多くの女性を入内させ、多くの皇子女が誕生した（「清和源氏」の成立）。

清和天皇の皇后として35歳の高子は、藤原氏の祖を祀る洛西の大原野神社に参詣し、52歳の業平も供奉している。車から降りた高子から、禄（褒美）を手ずから授けられた業平が詠んだ歌

大原や小塩の山もけふこそは 神代の事も思い出づらめ

（大原野において、この小塩山のふもとにある氏神様も、藤原氏出身の東宮の母の御息所が参拝になった今日のこの日には、神代のことも思い出しているでしょう）

清和天皇の譲位を受けて貞明親王は9歳で陽成天皇として即位。高子は35歳で「国母」となり、陽成天皇を補佐した。

陽成天皇が即位すると、高子は自邸で和歌のサロンを開き、業平や文屋康秀（ふんやのやすひで）ら有名歌人を招いている。百人一首に採用された業平の歌は、高子の歌会で、屏風の絵を見て詠まれたものである。

ちはやぶる神代も聞かず龍田川 からくれなゐに水くくるとは

（神代のような昔でさえ、聞いたことがない。龍田川がまるで紅葉で絞り染めしたように、水面を赤く染めているのは）

江戸時代に百人一首が広まると、この歌の珍解釈をテーマにした落語『千早振る』や、この歌を題材にした川柳が多数つくられる。競技かるたを題材にした現代の女性漫画『ちはやふる』の題名も、この歌から採られた。

その後高子は、39歳で清和天皇や業平と死別。高子43歳の時、陽成天皇が17歳で退位に追い込まれる。表向きは病気とのことだったが、実際は天皇が側近を殴り殺すという不祥事を起こしたためであった。高子と折り合いが悪かった兄の藤原基経は、次の天皇を高子の次男ではなく、陽成天皇の大叔父にあたる光孝天皇に決定。退位した陽成上皇と高子は二条宮に移り、高子は「二条后」と呼ばれた。

宇多天皇（光孝天皇の子）の時代、55歳の高子は、東光寺の僧侶と密通した疑いで、皇太后を廃される。高子は69歳で死去するが、死後33年目に名誉が回復され、皇太后の称号に戻された。

5 業平を巡る女性たち② 紀氏出身の女性たち

業平が主人公のモデルとされる『伊勢物語』では、伊勢神宮の神に奉仕する未婚の皇女・斎宮と主人公の男との禁断の恋が語られる。この斎宮のモデルは文徳天皇と紀静子との間に産まれた恬子（やすこ）内親王ではないかと言われている。ただ、この恋愛スキャンダルで恬子内親王が斎宮を解かれた記録はない。後世2人の密通で子供が誕生し、それが高階師尚（たかしなのもろなお）だという説も広く信じられたが、あくまで伝承の域を出ず、詳細は不明である。

恬子内親王の従姉妹が、業平の正妻である。彼女は業平の10歳年上の友人・紀有常（きのありつね）の娘であり、長男の棟梁（むねはり）を産んでいるが、『伊勢物語』によると、必ずしも夫婦仲は

良くなかったようである。

6 政治的敗者への連帯感

紀有常の妹静子は、文徳天皇が皇太子の頃から入内して更衣となり、第一皇子惟喬（これたか）親王や恬子内親王など、2男3女を儲けた。文徳天皇は惟喬親王を愛していたが、右大臣藤原良房の娘として入内した藤原明子（あきらけいこ）が天皇の第四皇子・惟仁（これひと）親王を出産。父の良房の圧力で、第四皇子の惟仁親王が、生後8か月で皇太子となった（後の清和天皇）。

業平は終生、失意の惟喬親王を慰め続け、家運が衰退する紀有常との友情も続く。政治的敗者同士の連帯感や、和歌を通じての主従愛や友情の表現で、政治的勝者の藤原氏より自分たちの方が和歌に秀で、文化的に優れているという自負を持っていたのである。

惟喬親王の別荘・渚の院（現 枚方市京阪御殿山駅近く）で開かれた花見の宴で、業平が詠んだ歌

「世の中に たえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」

（もし世の中に全く桜がなかったならば、春を過ごす人の心はどんなにのどかであっただろうか）

872（貞観14）年、病のため出家した親王は小野に隠棲。業平や紀有常らも、しばしば小野の親王の元を訪れた。

業平より3歳年上の左大臣・源融（みなもとのとおる）も、業平や行平と親しく交わっていた人物である。嵯峨天皇の第12皇子として生まれた彼は臣籍に降下し、左大臣になるが政治の実権は藤原良房や基経が握っていた。生来の風流好みと巨富により、融は鴨川の畔東六条に広大な河原院を営み、豪奢な生活を送った。光源氏のモデルの1人とされている融だが、政治的敗者としてまた優れた歌人として、業平兄弟とは同志だったのである。

7 業平の和歌

初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の編纂者の1人・紀貫之は、仮名序で和歌の本質や価値を説いている。和歌の理想像として柿本人麻呂と山部赤人を挙げ、次に新世代の高名な6人の歌人（六歌仙）の和歌を評している。その中で業平の和歌について

「その心余りて詞（ことば）たらず しほめる花の色なくて にほひ残れるが如し」

（和歌に込めた情熱が多すぎて、表現が不十分） と評した。

業平の和歌には、技巧を凝らしたものもある。

「かきつばた」の五文字を句の頭に置き、妻を残してきた心情を詠った歌がよく知られている。

「から衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬるたびをしぞ思ふ」

（何度も来て身に馴染んだ唐衣のように、長年慣れ親しんだ妻が都にいたので、妻を残したままはるばる来てしまった旅のわびしさを、しみじみと思うことです）

しかしやはり彼の真骨頂は、情熱を吐露した和歌である。

「月やあらぬ 春や昔の春ならぬ わが身一つはもとの身にして」

（月は変わってしまったのだろうか、春は昔の春ではないのだろうか。私だけは昔のままなのに）
昔の恋人が住んでいた家を訪れた際、変わり果てた様子を見て、時の流れの無常さを詠んだもの。あ
りのままの気持ちを詠んでいるのでわかりやすく、歌の調子も良い。

「名にし負はば いざこと問わむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと」

（都という名前を持っているのなら、都鳥よ、私が恋い慕う人は無事であるかどうか、尋ねてみよ
う）

家族と別れ、権力の中核・都から離れていく人たちの心情を受け止めて昇華させ、強い共感を得た。

業平の死後 25 年に完成した『古今和歌集』に、業平の歌は 30 首採用されている（六歌仙中最多）。
業平の歌には異様に長い詞書があり、物語的である。彼の言動を知らせようとする撰者（紀貫之、紀友
則、壬生忠岑、凡河内躬恒）の意図があったとされる。

この時期に『伊勢物語』の原型の 1 つも誕生した可能性がある。

8 業平の子孫

業平と妻との間に誕生した長男・棟梁（むねはり）、生母不詳の次男・滋春（しげはる）、棟梁の子
（業平の孫）元方（もとかた）は、いずれも歌人として有名。元方の歌は、『古今和歌集』の巻頭を飾
っている。

「年の内に春はきにけり ひととせを 去年（こぞ）とはいはむ 今年とやいはむ」

（まだ暦の上では年が明けていないのに、うるう年なので、もう立春がやってきた。これまでのこの
1 年を、去年と呼ぶのだろうか、それとも暦の上の元日までは、今年と呼ぶのだろうか）

棟梁の娘（業平の孫）は祖父譲りの美貌の持ち主で、藤原基経の兄・国経の妻となったが、基経の嫡
男・時平が彼女を奪ったと『今昔物語』に伝わる。この話を基に、谷崎潤一郎は小説『少将滋幹（しげ
もと）の母』を書いた。

9 語り継がれる業平と『伊勢物語』

『伊勢物語』は「色好み」の理想形を描いた物語として、『源氏物語』などその後の物語文学や和歌に
大きな影響を与える。和歌の心を涵養するため、『伊勢物語』は繰り返し読むべき古典とされ、『源氏物
語』よりも重んぜられた。注釈書も大量に作られ、中世には謡曲、近世以降は人形浄瑠璃や歌舞伎の題
材となり、庶民にも広まった。『伊勢物語』を題材にした謡曲には『雲林院（うんりんいん）』『井筒』
『小塩（おしお）』『杜若（かきつばた）』など。歌舞伎では舞踏の主人公として登場し、数々の踊り＝業
平踊が作られた。絵画や工芸の題材としても取り上げられ、「ゆかりの地」も各地に誕生した。

『伊勢物語』を題材にした工芸品としては、尾形光琳作の八橋蒔絵螺鈿硯箱（やつはしまきえらでん
すずりばこ）が有名である（東京国立博物館像）。『伊勢物語』を題材にした絵画も数多くあるが、今回

紹介したのは鉄心斎文庫伊勢物語文華館（神奈川県小田原市）所蔵の『伊勢物語彩色絵入』（江戸時代）より、布引の滝と芦屋浜の場面。

業平ゆかりの地として、よく知られているのが兵庫県芦屋市である。『伊勢物語』を題材にした謡曲『雲林院』は、芦屋に住む『伊勢物語』ファンの公光（きんみつ）が夢で業平と二条後の姿を見、彼らがいた京都の雲林院を実際に訪ね、桜の木の下で老人（実は業平の霊）と出会う。老人の勧めで桜の木の下で眠ると、夢に業平の霊が現れ、『伊勢物語』の数々を夜通し語るという内容。芦屋市には登場人物に因む町名や橋、祠がある。

『伊勢物語』87段には、摂津国菟原郡芦屋の里に主人公の所領（別荘）があり、訪れた主人公の兄や友人たちと共に、海や布引の滝を遊覧した話がある。江戸時代には、業平の別荘は芦屋川左岸にあったとされ、業平町の名の由来となっている。

10 業平や『伊勢物語』ゆかりの地

不退寺（奈良市） 業平の祖父・平城太上天皇が剃髪後隠棲した「萱の御所」で、阿保親王や業平もこの地に住んでいた。仁明天皇の勅願により、業平が開基。

在原神社（奈良県天理市） 業平生誕の地とされ、謡曲『筒井筒』で『伊勢物語』主人公が、幼少期に妻と遊んだとされる井戸がある。元は在原寺もあったが、廃仏毀釈で在原寺は廃寺となった。

業平邸跡（京都市中京区） 左京四京三町に石碑が建つ

大原野神社（京都市西京区） 藤原氏の「氏神三社」の1つで、奈良の春日大社から勧請を受ける。藤原氏の家に女子が生まれると、その子が皇后・中宮になれるようにと祈願し、祈願通りになると行列を整えて参詣することが通例になっていた。

十輪寺（京都市西京区） 業平が晩年住んだとされる寺で、境内の裏山には、業平が高子を想いながら塩を焼いた塩竈（しおがま）や、業平の供養塔がある。春には「なりひら桜」が咲く。

阿保親王塚古墳（芦屋市） 江戸時代、阿保親王の子孫を称する長州藩が大改修を行ったが、実は古墳時代前期（4世紀）の地方豪族の墓。

在原業平歌碑（芦屋市） 芦屋川沿いの松ノ内緑地に建つ。「世の中にたとえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」の歌が刻まれている。

公光・業平の祠、業平町、公光町、業平橋、公光橋（芦屋市）

配布系図資料出典

皇室・在原氏略系図：『伊勢物語謎多き古典を読む』（杉本苑子 中公文庫）

伊勢物語 土佐日記 関係系図：『新潮古典文学アルバム 伊勢物語/土佐日記』